

# 『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食（その5）

杉浦 博子、井上 亜沙美  
愛知学泉短期大学

## Life and Food in “Jojiin Hibetu Zakki” (Part 5)

Hiroko Sugiura, Asami Inoue

キーワード: 東三河地方 East Mikawa area, 食文化 food culture, 贈答 an exchange of gifts

### 1. はじめに

筆者らは、近世の地域の食生活文化の特徴をとらえるため、庄屋文書などを取り上げ、検討してきた。本稿では、寺院でのくらしと食生活の関わりについて、先報<sup>1)~4)</sup>に続き、雑記類より1875年~1886年(明治8~明治19)の東三河地方の食生活文化の一端を明らかにしたい。

### 2. 方法

先報と同様に、『豊橋市浄慈院日別雑記Ⅳ』<sup>5)</sup>『豊橋市浄慈院日別雑記Ⅴ』<sup>6)</sup>より1875年~1886年の「山澄日別雑記」(以下雑記とする)を中心に地方の食文化について検討する。なお、1875年・1879年・1880年、特に1880年は欠落が多く、1877年・1878年は所在不明である。<sup>7)</sup>

また1885年は8月24日まで、1886年は5月22までの記述であり、浄慈院八世院主慈明覚禅師により記録された日記である。1887年に九世を継いだ弟子の貫通が、1886年8月3日~1887年1月14日分を書きいれている。<sup>8)</sup>

### 3. 結果及び考察

#### (1) 寺院の行事と食生活

雑記では、1875年は、4月から6月にかけて痲痘祈祷の記録が多くみられる。また1879年は、コレラが京阪神地方に流行し、愛知県では1879年7月3日に布達が出された。豊橋地方では、東海道と平坂、前芝などから伊勢に渡る

渡船者以外は、通行禁止になっている。<sup>9)</sup> その状況を雑記では、8月9日「コレラ病流行、下地・船町コロコロ死スル者有ル」、8月14日には「コレラ予防ノ為町方も祭礼同様ノ騒キ故云々……」と騒動の様子を記している。<sup>10)</sup> また、1882年にも魚町で死亡者があり、石炭酸を吹きかけるともあった。<sup>11)</sup>

1883年は、弟子の恵明が病に倒れ12月晦日に死去するが、病状の進行と見舞いの品については、後述する。

#### 1) 正月・人日の節句

暦は、1872年(明治5)12月3日以降、新暦(太陽暦)に移行する。しかし雑記では、1873年(明治6)の2月1日より新暦での記載になってはいるが、1885年(明治18)頃でも、行事等は旧暦のまま行われている。

浄慈院では、表1に示すように正月三カ日は、小食は小豆粥、斎は薯蕷汁や白飯を諸尊に供えている。

表1 元旦の食事

年 月 日	元 旦		二 日		三 日	
	小 食	斎	小 食	斎	小 食	斎
1875・2・6	小豆粥	雑煮	小豆粥	雑煮	小豆粥	雑煮
1876・1・26	小豆粥	雑煮	小豆粥	薯蕷汁	小豆粥	雑煮
1880・2・10	小豆粥	雑煮	小豆粥	薯蕷汁	小豆粥	雑煮
1881・2・1	小豆粥	雑煮	小豆粥	雑煮	小豆粥	薯蕷汁
1882・2・18	小豆粥	白飯	小豆粥	雑煮	小豆粥	雑煮
1883・2・8	小豆粥	雑煮	小豆粥	薯蕷汁	小豆粥	雑煮
1884・1・28	小豆粥	雑煮	小豆粥	雑煮	小豆粥	雑煮
1885・2・15	小豆粥	雑煮	小豆粥	雑煮	小豆粥	雑煮

1月7日の人日の節句には小豆1升、黒砂糖1~2斤程度求めて汁子餅の支度がなされている。1882年2月24日には、「旧七日当人日静也、愛度」「節会也、小豆一升式合四勺沢口漉アソニ致ス」「朝七草粥斎汁子餅諸尊へ供ス」とも

ある。前日に黒砂糖 2 斤を 26 銭で求め、「おのぶ明日支度酢あへ等ヲロス」<sup>12)</sup>と支度の様子を記している。この年は、七草粥も汁子餅も供えたようで、来客にも汁子餅を振舞っている。

## 2) 桃の節句

3 月 3 日の桃の節句は、新暦では 3 月下旬から 4 月中旬になるが、諸尊に小豆飯が供えられている。表 2 のように、桃の節句には餅の到来が多く、特に、節句前日の記録が多い。餅の形状は明確ではないが、餅と節句餅と併記しての記入もみられる。そのほか、饅頭や洲浜もみられる。洲浜とは、米粉に甘味を付け蒸したすあま<sup>13)</sup>で、現在も当地方では、店頭でみられる菓子である。1881 年は、本家より「雛ノ花から餅・まん中等種々一重入ル」<sup>14)</sup>とあるが、この「花から餅」については、今後の課題としたい。

また、1883 年は、4 日に新家の男児の天神の祝餅一重、翌 5 日にも祝餅が届けられている。女兒の節句と併せて、男児の節句も行われている。餅や饅頭のほかに「すし」の記録がみられ、手製のすしと区別し「売酢シー包」とあり、買い求めて贈られている。

表2 桃の節句

年 月 日	斎	到来の食品
1876・3・28	小豆飯	(25日) 餅一重 (26日) 餅一重 (27日) 餅一重・巻餅、餅一重 2件 (28日) 餅一重 3件、餅 九ツ (29日) 餅一重 2件
1879・3・25	小豆飯	(22日) 節句餅 三ツ・売酢シ 一包 (23日) 餅一重 (24日) 餅一重 6件
1880・4・12	小豆飯	(11日) 餅一重 5件 (12日) 餅一重
1881・4・1	小豆飯	(31日) 餅一重 2件 (2日) 花から餅・まん中種々 一重
1882・4・20	小豆飯	(19日) 餅一重 4件 (20日) 手製のまん中・巻ずし・洲浜 2本
1883・4・9	小豆飯	(4日) 天神祝餅 一重 (5日) 天神祝餅大 三ツ (7日) 餅一重・餅 五ツ・大餅 三ツ (8日) 餅一重 3件 (9日) 洲浜式本・まん中 一包
1885・4・17	小豆飯	(14日) 大餅三ツ・雛餅一重五ツ (15日) 餅一重 (16日) 餅一重 4件 (18日) 洲浜 三本

## 3) 菖蒲の節句

5 月 5 日の菖蒲の節句は、桃の節句と同様、表 3 に示すように、新暦では 5 月下旬から 6 月中旬になり、諸尊には白飯、小豆飯が供えられる。桃の節句と同様、節句の前日の柏餅の到来が多くみられが、1885 年のように、節句の時期以外にもみられる。

この地方では、この菖蒲の節句には凧を揚げ

る習慣があるが、その様子もみられる。<sup>15) 16)</sup>

表3 菖蒲の節句

年 月 日	到来の食品
1876・5・28	(5月14日) 柏餅、餅一重 3件 (17日) 餅 2件 (24日) 柏餅 2件 (26日) 柏餅 (27日) 柏餅一重 7件、柏餅 (28日) 柏餅 2件 (6月23日) 柏餅十
1879・6・24	(5月25日) 柏餅一重・餅一重 (27日) 柏餅十三 (28日) 柏餅一重、餅一重 (30日) 柏餅一重 (31日) 柏餅一重、柏餅 七ツ (6月 1日) 柏餅一重 (4日) 柏餅一重、餅一重 (13日) 柏餅一重 (24日) 柏餅一重 3件、柏餅七ツ、柏餅
1880・6	(6月 2日) 柏餅一重 (13日) 柏餅一重 (16日) 柏餅一重 (23日) 柏餅十三
1881・6・1	(5月10日) 柏餅十一、七ツ (17日) 柏餅一重 2件 (18日) 餅十一 (21日) 柏餅一重、餅一重 (22日) 餅一重、柏餅十一 (23日) 柏餅一重 (26日) 餅一重 (28日) 柏餅一重 (31日) 柏餅一重 7件 (6月 7日) 柏餅十一 (12日) 柏餅一包(十五)
1882・6・20	(5月26日) 柏餅一重 (27日) 餅一重、柏餅 (6月10日) 柏餅二重 (11日) 柏餅十三、十五 (12日) 柏餅一重 (14日) 柏餅一重 (17日) 柏餅一重 (18日) 柏餅一重 2件 (19日) 柏餅一重 3件、柏餅 (20日) 柏餅一重、柏餅
1883・6・9	(6月 5日) 柏餅一重 (8日) 柏餅一重 3件、柏餅沢山 (9日) 柏餅一重 2件 (10日) 柏餅沢山 (24日) 柏餅
1884・5・29	(5月23日) 柏餅一重、唐ノ柏餅一重 (24日) 柏餅一重 (28日) 柏餅一重 4件 (29日) 柏餅一重 3件
1885・6・17	(3月 1日) 柏餅一包 (6月 2日) 柏餅六ツ (6日) 柏餅一重 (11日) 柏餅一重 (16日) 柏餅一重 2件

註) 1880年は、6月3日以降12日まで脱落のため日付は空欄とした。

## 4) 七夕の節句・中元の節句

七夕の節句は、新暦では 8 月にあたり、斎には、小豆飯<sup>17)</sup>や鯉鮓<sup>18)</sup>、そして、入麴<sup>19)</sup>が用意されている。

中元の節句は、8 月の中旬から 9 月にかけて行われている。七夕同様、斎は鯉鮓や素麺であり、当日の来客にも振る舞われている。

## (2) 病氣見舞いと食べ物

## 1) 病状と食べ物

浄慈院の弟子である恵明は、7月ごろより体調を崩した様子で、「・・・病臥中□□旧五月下旬より食事ツカへ病ノ初メ、満廿才ニ而命果可惜哉可嘆哉・・・」<sup>20)</sup>とあり、12月31日に死去している。

この恵明の病氣療養中に、届いた見舞の食品を表4に示した。白砂糖が最も多く、次いで羊羹、利休饅頭や米饅頭などの饅頭や、蒸し菓子などの菓子類である。特に、助十郎からは、二度も砂糖漬の菓子が届いている。紺屋町の池田屋製の立派な品物であると記されているが、病の重さ、贈り主の病人に対する想いが、うかがわれる。また、甲州葡萄や病人の好物であろうか、柏餅もみられる。また、白味噌を買い求め、餅を煮て食べさせてもいる。<sup>21)</sup>

年月日	名前	食品	備考
1883・8・11	源一郎	米砂糖一袋(七十五匁)	一 (子供)筆一本
13	三平	シルル餅一鉢	
14	平吉	白砂糖一袋(四半斤ノヨ)	一 菓子
15	三九郎(内)	温純一重	
18	源右衛門	蒸菓子一箱	
	(三相)平三郎ノミナ	あけ一重	一 菓子
21	龍運寺	練羊かん一本	
22	(浦川)富太郎	白砂糖一袋(四半斤ノヨ)	そうめん 出ス・茶 出ス 一 扇子・筆一本
23	勝次郎	菓一鉢	
26	三平(内)	柏餅十	
29	信真寺	菓子一箱	
	平四郎	そうめん一包	
	藤林	奈良漬一袋(廿三匁)	手製
30	利一郎	金米糖一袋(六十五匁)	
	(竹意軒)賢順	白砂糖一袋	
31	源一郎	まん中一袋	
9・1	半左衛門	蒲陶	
	隆吉	蒸菓子一箱	
	三吉	金米糖一箱	
	猪作	白砂糖一袋	
	庄三郎	白砂糖一袋	
4	(仁連木)林作	白砂糖一袋	
	(西町)熊太郎	白砂糖一袋(半斤)	
6	柳蔵(内)	白砂糖一袋	
	(中州)藤助一益 沢山	菓子一箱	
7	勝次郎	菓一箱	
9	利右衛門(内)	温純一重	一 菓子
14	賢次郎・松五郎	金米糖一箱	
15	勝次郎	温純一重	一 菓子
	(花園町)銀造	練羊かん一箱	
18	勝次郎	菓之類一器	
22	龍運寺	白砂糖半斤	
25	秀	練羊かん一本	
	文平	温純一重	一 菓子
26	清川重右衛門	白砂糖(三半斤)	
28	いせ	柏餅一包(廿五)	
	新家	香の物一包	猪作方ニ而 買ヒ物

註)備考の矢印は、返礼として浄慈院から贈った品物である。

恵明の病状については、毎日克明に記されている。8月上旬に「日々咳増ス」<sup>22)</sup>、「晩方咳出血ル」<sup>23)</sup>。そして、診察の結果は、「肺ノ方重シ」<sup>24)</sup>とある。数人の医者に診てもらい、薬も処方されているが、病状は悪化の一途をたどる。12月中旬以降「稗ノ粥朝少食ス、蒸菓子も一両日ハ甘過テ悪シ」<sup>25)</sup>、「朝栗餅焼只少々食ス」<sup>26)</sup>、「大ニヨワル、薬品も不進也、乳計り也、唐みかん也、シルル位ニ而腹張故不進也」<sup>27)</sup>とある。そして、晦日には、「夜に入ル頃ニ飯食スと云、

溜り落シ桜飯ニ致し、あけ入レ勸スル処、小一膳程味ク食ス、米白味噌煮て悦ひ食ス」<sup>28)</sup>とあり、その後、臨終を迎えている。

重病の恵明が、最後に口にした桜飯は、ご馳走だったことは、祭礼にも出されることから、うかがわれる。9月15日(旧暦の8月15日)は八幡社の祭礼であり、神楽が舞われ、酒も甘酒も沢山あった。体調の優れない恵明も14日の宵祭りには、「保養ナカラ」神楽見物に出かけている。この15日の斎には、前日の14日に7銭5厘で求めた溜り5合を使い、桜飯と煮メの支度をしているのである。<sup>29)</sup>

年月日	氏名	食品	備考
1883・10・1	平六	米まん中一包(十五)	
3	(岸)又ハ	煉羊かん一本	
	善吉	煉羊かん一箱	小倉屋ノ
4	常滑(内)	まん中十	一 菓子
7	伝四郎	温純少	
10	(瓜郷)久左衛門	阿波そうめん 三ワ	
11	勝次郎	菓之類	
17	喜子	蕎麦一重 沢山	
19	(新田)伊作	利休まん中 廿六	一 菓子一包(子供)筆二
	(羽根井)柳蔵	温純一重 沢山	
23	久三郎	菓子糖付け 四ツ	
	(新田)猪作(内)	さつま芋、柿	
27	隆吉	まん中十	
11・3	(成沢)要吉	煉羊かん一箱	茶漬出ス
7	閑屋たつ	力牛餅一袋	
11	隆吉	ゴモク飯	
13	三九郎	白砂糖一袋(四半斤)	
14	(三太郎)母	白砂糖一袋(四十匁)	
	庄三郎	梨四ツ	
18	綱屋	奈良漬三舟	
19	勝次郎	砂糖かん五	
24	助十郎	砂糖漬一箱	立派ノ品也(紺屋町・池田常蔵製)
26	(御堂門前)善作	白砂糖一袋(六十五匁)	
	要吉(成沢)	煉羊かん一箱	一 到来ノ煉羊かん一本・柚子五十
	龍運寺	煉羊かん一箱	
27	新家	唐みかん	
29	平六(内)	蕎麦切一重	
30	勝次郎	唐みかん	
12・2	弥一郎	白砂糖一袋(三十匁程)	
	ちか	甘酒一重	一 菓子
6	源右衛門(内)	蒸菓子二十入一箱	一 菓子
7	新家	唐みかん八	
9	新家	唐みかん	
10	新家	唐みかん八	
11	中安太郎	菓子一袋	
	三吉(後家)	柏餅一包	
	(西羽田)金作(母)	白砂糖一袋(三十三匁)	
	七蔵	そうめん一包	
12	周吉	柏餅九	
	(野依)惣平	白砂糖一袋(六十匁)	
13	(仁連木)林作(母)	白砂糖半斤	
14	富作	蒸菓子一箱	
15	(北)平作	白砂糖一袋(六十匁)	
	哲太郎	蒸菓子一箱	
	伝四郎(内)	白砂糖一袋(三十匁)	
	喜三郎	白砂糖一袋(一斤)	
18	市右衛門	そうめん	
19	金田 喜右衛門	あけ十三	
	(新田)七兵衛(内)	白砂糖一袋(廿匁)	
20	おゆき	羊かん一本	
	兵蔵	菓子一袋	
	新家	唐みかん 三十三	(紺屋町・池田や製)
21	助十郎	菓子砂糖漬一箱	
22	亀次郎	白砂糖一袋	
25	新家	唐みかん	
26	新家	唐みかん	
27	八五郎	白砂糖一袋(六十匁)	
	政平	稗ノ菓子一重	
	善八(内)	白砂糖一袋(三十五匁)	
28	幸次郎	上菓子一袋	
	庚申寺	白砂糖一袋(八十匁)・まん中一袋(十)	
	平六(内)	温純一重	
31	龍運寺	金米糖一箱	
	弥一郎	まん中一包	

註)備考の矢印は、返礼として浄慈院から贈った品物である。

## 2) 牛乳の飲用について

病に臥す恵明には、10月18日から伯母にあたる関屋の「たつ」から牛乳を入手し、飲ませている。その量は、当初5勺であったが、21日からは1合に、31日からは、また5勺に戻っている。亡くなる2日前の12月29日まで牛乳を取りに行っている記録がみられるが、「乳の印シカ嫌(元) 気も少出来ル様也」<sup>30)</sup>ともあるように、体調も一時は安定したようである。その後2ヶ月余り飲用している。牛乳の値段は、1合5銭で、11月1日に57銭5厘支払っているが、<sup>31)</sup> 桜飯用に求めた溜りと比べても、高価なものである。

日本の飲用乳については、1869年に嶺岡牧場が宮内省の御料牧場となるが<sup>32)</sup>、すでに、1851年水戸蘭方医『方庵日記』に「牛乳服用始」ともある。<sup>33)</sup> また、幕末の1862年には、肺病の治療に牛乳を飲用しており、1合の値段が1分であったという。<sup>34)</sup> 浄慈院では、弟子の恵明の病氣治療には、当時としては最高の手当てをしている。体調を崩してからは、医者も替て延べ四名の医者の診察を受けているが、8月には「帝ノ御典医ニ而異国修行人」<sup>35)</sup> の診察も受けている。恵明の体力回復のために、牛乳の効用が認められていたのであろうか。

また、愛知県での搾乳の歴史は、1882年では、県全体で69頭の乳牛の飼育がみられ、渥美郡では、6頭が飼育されていた。<sup>36)</sup> また、同年には、牛乳搾取販売規則も公布されている。<sup>37)</sup> 明治中頃までは、牛乳を買うと病人がいると思われるようで、健康人の飲用物ではなかったようである。<sup>38)</sup>

## (3) 贈答と食品

## 1) 年末・年始の挨拶

年末や年始には、多くの品物のやりとりがみられる。その内容は、表5に示すとおりである。浄慈院へは、豆腐や油揚げ、串柿、蒟蒻、海苔、薯蕷、牛蒡などの食品類が多く届けられているが、弟子の恵明にも、足袋が届いている。このほか、羊羹や蒸し菓子などの菓子類などもみられる。そして、浄慈院からは、年末・年始には、寺で収穫されたみかんや半紙の類を、各方面に贈っている。

表5 年末・年始の品物のやりとり(その1)

年 月 日	名 前	内 容	浄 慈 院	備 考
1876・1・25	本家	薯蕷 一包・祝儀 一包 →		(旧)12・29
	久左衛門	五銭 配書・海苔 十枚 → 半紙 五枚		
	猪左衛門	← 半紙 五枚		
	伝次郎	← 半紙 五枚		
	五郎兵衛	← 半紙 五枚		
	新家	人参 沢山 →		
	源次郎	菜 一転(縛) → 米 一升		
	七蔵	← 米 一升		
	利右衛門	← 半紙 一丈		
	平六(内)	あけ → 半紙 一丈		
	堅次郎	豆腐 二丁 → 墨一筆 二		
	三平	豆腐 二丁 → 半紙 一丈・筆 二本		
	三次郎	豆腐 二丁 → 半紙 二枚		
	平吉	豆腐 二丁 → 米 一升・炭 一五・筆 二本		
	惣助	米 一升・薯蕷 一包 →		
	政平	重いも 一鉢 → みかん 一東		
	権四郎	豆腐 二丁 → みかん 一東(五十)		
	さつま芋・薯蕷	足袋 一足(恵明) → 小ツみかん 一籠		
28	常清	← 海苔 十枚・豆腐 二丁		(旧)1・3
31	三九郎	黒砂糖 巻升余 →		
	芳太郎	海苔十枚 →		
	伝次郎	利休 まん巾 一箱 → 筆 四本		子供・兩人
2・8	(牛川)本多	← みかん 五十		
	間瀬木	手拭 一筋 → みかん 一東三十、蒸菓子 一箱		
	関口	← 紙 筆、みかん 五十		年玉
9	五郎兵衛	紙燭 廿一丁 →		
	平六(内)	米、串柿 十本 →		

註)矢印は、先に贈ったことを表す。

表5 年末・年始の品物のやりとり(その2)

年 月 日	名 前	内 容	浄 慈 院	備 考
1880・2・3	定年	さつま芋 → みかん 一東		(旧)12・23
	忠右衛門	さつま芋 → みかん 一東		
	龍運寺	← 上みかん 五十		年玉
4	政平	手拭 一筋 → みかん 一東		
	慎真寺	菓子 一箱 → みかん 一東		
	竹意軒	← みかん 五十		
5	庄三郎	足袋 一足 → みかん 一東五十		
	平六(内)	← 半紙 二枚		
	権右衛門	← みかん 二東・菓子料十二銭五厘		
6	豊	足袋 一足 → みかん 一東五十		
	平六(内)	こんにやく 十五 →		
	亥作	小豆 一升・牛蒡 → 唐みかん 廿		
7	源右衛門	← 半紙 三帖		
	半左衛門	← 竹林墨 一挺		
	久三郎	← たまり 一升		
	三九郎	← たまり 一升		
	新家	← たまり 一升		
	本家	← たまり 一升		
	弥一郎	← 半紙 三枚		
	横田屋	さとふ 一袋 → 上みかん 七十		
	三次郎	豆腐 二挺 → 半紙 二枚		
	三平	← 半紙 二枚		
8	喜三郎	足袋 一足 → 小唐みかん・小ツみかん 凡四五升		
	堅次郎	豆腐 二挺 → 半紙 一		
	利右衛門	← 半紙 二		梅の花 受ル
	ちか	あけ 十 → 米 一升		
	伝次郎	串柿廿本 → 揮月 一本		
	久三郎	蒸菓子 一箱・海苔 十枚 → 揮月 一本		
	勝次郎	砂糖 一重 →		
	(恵明)足袋 巻足			
2・9	伝次郎	← 半紙 三枚		
	七蔵	こんにやく 九ツ → 米 一升		
	清七(内)	とうふ 二挺・蕎麦粉 一袋 → 揮月 一本・墨 一挺		
	栄之助	串柿 廿本 →		
	俊次	こんにやく 十 → 墨 一挺		子供
	孫太郎	菓子 四足 → 小みかん 一東五十・揮月 一本		
	権太郎	豆腐 二挺 → 半紙 一丈		
	富田惣太郎	米 一升・牛蒡 一東 →		
	柳吉	菓子 一袋 →		
	横田屋	黒さとふ 巻袋 → みかん 七十		代金支払い (旧)1・1 参詣
10	新家	人参 五本 →		
11	本家	串柿 十本・こんにやく 七ツ →		
	源右衛門	四銭八厘 →		
	森吉	五銭菓子配書 →		年玉
14	龍壽寺	納豆 一箱 →		年礼
	惣左衛門	祝儀 一包 →		
16	新田	← 千歳二窓の月 十六		(恵明)年頭二行
	喜三郎	← 千歳二窓の月 十六		(恵明)年頭二行
18	常清	らう 七丁・半紙 二枚 → みかん 七十		参詣
	長七	唐倉 一足 → 上みかん 一東		年頭

註)矢印は、先に贈ったことを表す。

また、久三郎が、横浜の糸問屋から、年玉に貰ったブリキ缶入りの海苔を、浄慈院が貰い、珍しい品である<sup>39)</sup>と記しているのも興味深い。

この品物のやりとりについては、特に 1884 年は、前年の 12 月 31 日に弟子の恵明が亡くなり、葬儀・初七日の法要などがあり、多忙な様子が見とれる。浄慈院からは、「恵明見舞ヲ受、葬式等二取持礼」<sup>40)</sup>など、弟子の恵明への病氣見舞や葬式などで、世話になったことに対しての謝礼の意を込めた贈答も多くみられる。

年月日	名前	内容	浄慈院	備考
1881・1・28	久三郎	← 蒸菓子	歳暮	
	三九郎	← 半紙 五帖		
	三次郎	← 半紙 二帖		
	弥一郎	← 半紙 三帖		
	利右衛門	← 豆ふ 二挺		
	七蔵	← 米 一升		
	平六	← 半紙 二帖		
	源右衛門	← 半紙 三帖		
	俊次郎	豆ふ 二挺		
29	新家	人参 十五本	歳暮	
	久三郎	納豆 一重、三鉢・菓子配書	← 墨 一	
	三九郎	串柿 十本	← 墨 一	
	松之助	大牛房 三本		
	松助	牛房 沢山		
	佐次郎	豆ふ 二挺	歳暮	
	栄助	鯨口 口箱、串柿十本	← 墨 一挺	
	政平	手拭 一筋	← 手拭 一筋	
30	宣平	蒸菓子 大一箱	← みかん 七十・小ツみかん一袋	
	(牛川)本多	帛紗 一・年玉 一包		
2・1	喜三郎	薯蓣芋 沢山	← 半紙 二帖・菓子 一包	
	賀次郎		← みかん 五十	
	閑屋		← みかん 五十	
	拙庵		← みかん 五十・蜜・紙	
	(戸長)重次郎		← 中みかん 五十・紙二巻	
	口三郎		← 半紙 三帖	
	観音院			
5	いせ	あけ 十二	年玉	
	三三	十鉢	歳暮	
6	辻平	祝儀 一包・蒸菓子 一箱	年礼	
	恵明		旧里へ 年頭	
	瑞林	年玉 十鉢・抽香烟 一本	年礼	
	平六(内)	串柿 十本・祝儀	歳暮・年玉	
8	秀	金米糖 一箱	年礼	
	恭	練羊かん 一本	年頭	
	本家	← 串柿 五本・菓子 一袋	年頭	
	新家	← 串柿 五本	年頭	
1882・2・13	喜三郎	← みかん 一東・半紙 一東	年内礼	
	彦太郎	← みかん 七十・半紙 一東	手伝礼	
	庄三郎	← みかん 七十		
	伊作	← みかん 七十	さつま芋 受ル	
14	平吉	櫻餅 一本	大根 沢山	歳暮
	八五郎	← みかん 五十		
	横田屋	← みかん 五十		
	三次郎	あけ 七ツ	菓子	
	俊次郎	豆ふ 二挺	菓子	
15	平六(内)	豆ふ 二挺	半紙 二帖	
	喜三郎	足袋 一足	半紙 二帖・墨	
	本家	串柿 十本		
	新家	人参 沢山		
16	清次郎	さつま・豆ふ 二挺	半紙 二帖	
	三平(内)	豆ふ 二挺	半紙 二帖	
	亀次郎	豆ふ 三挺	半紙 二帖・細筆	
	久三郎	串柿 廿本・納豆 一重	半紙 二帖	
17	平十	豆ふ 二挺	菓子	子供
	叔次郎(母)	牛房 七本	菓子 一包	金貨礼
	三三	牛房 沢山		歳暮
	久三郎	牛房 沢山	半紙 五帖・清凡茶 一袋(廿七匁)	歳暮
	猪左衛門	← 半紙 二帖		
	三次郎	← 半紙 二帖		
	利右衛門	← 豆ふ 二挺		
	俊次郎	← 半紙 三帖		
	源右衛門	← 半紙 三帖		
	七蔵	← 米 一升		
	平吉	← 米 一升・半紙 三帖		
19	熊太郎	菓子 一袋	雨 一本	年玉
	三九郎(内)	串柿 十本・糖 一重		歳暮
	口平	菓子 一箱・祝儀		年礼
3・1	(成沢)重吉	金米糖 一箱		(旧)1・12 年礼
5	助十郎	あけ 十八	紙 二帖	年礼・祝儀
	亀次郎	祝儀		
	直次郎	海苔 三帖		年玉
20	伊藤さと	祝儀 一包・金米糖 一袋(一斤)	← 半紙 二帖・筆 一	年礼
	本家	← 梅寄糖		年頭二行
	新家	← 梅寄糖		年頭二行 仏名参

註)矢印は、先に贈ったことを表す。

年月日	名前	内容	浄慈院	備考
1883・2・4	権右衛門	← 半紙一東・蜜柑 一東	歳暮	
	伊作	← みかん 一東		
	庄三郎	← みかん 一東		
	恵明	ツクね芋	← みかん 一東五十	旧里
5	(閑屋)はる	梅菓 一袋	← 蜜柑 七十	
	助吉		← みかん東	
	拙庵	海苔 十枚	← 蜜柑 一東	
	久三郎		← 半紙 五帖・菓子 一箱	
	猪左衛門		← 半紙 五帖	
	俊次		← 半紙 三帖	
	三次郎		← 半紙 二帖	
	伝次郎		← 三帖	
6	喜三郎	足袋 一足・膏米 一升・こま初尾米	← 小みかん 二袋	歳暮
	勝次郎	人参 沢山		
	俊次郎	豆ふ 二丁	← 半紙 二帖	
	平六	豆ふ 二丁・こま初尾米	← 半紙 二帖	
	平吉	豆ふ 二丁	← 米 一升	
	久三郎	串柿 廿本	← 半紙 二状	
	権四郎	ツクね芋 二ツ	← みかん 一東	
	助十郎	黒砂糖 一袋一斤	← みかん 一東	
	柳屋(内)	串柿 廿本・二初尾米	← みかん 一東・小ツ 一袋	
7	久三郎	串柿 廿本		
	三平	豆ふ 二丁	← 半紙 二帖	
	惣太郎(使)	米 一升・星芋 一匁		
	三次郎	あけ 十	← 菓子	子供
	七蔵	あけ 十	← 米 一升	
	伝次郎	半紙 一東・膏米 一升	← 菓子 一包	子供
	本家	串柿 廿本	← 半紙 五帖	
	善太郎	里いも 一袋	← みかん 一東・不換金 一本	子供
	源右衛門		← 半紙 三帖	
9	久三郎	四季花 名古屋産一器入		(旧)1・2 年礼
	直次	こんにやく 十七		
	竹恵軒	こんにやく 廿一・膏・付木		年礼
10	小沢熊太郎	菓子 一袋	← みかん 三十	年礼
	柳吉	菓子 一袋		年礼
	清涼寺	蜜		年玉
11	つね	祝儀 一包		礼入
20	(成沢)重吉	金米糖 一箱		年頭
28	利右衛門	ツクね芋		歳暮
3・7	辻平	祝儀 練羊かん 一箱		年頭
15	次三郎	祝儀・伊多里・まん中一箱(十五)		年礼
1884・1・26	伝吉	畑米		
	弥一郎	豆ふ 二丁	← 菓子・蒸菓子 一箱(十二)	子供二
	三次郎	豆ふ 二丁	← 半紙 三帖	
	三吉(後家)	小豆 一袋	← みかん 一東(五十)	
	善吉		← みかん 一東	恵明病氣見舞ヲ貰
	哲太郎		← みかん 一東	恵明病氣見舞ヲ貰
	常清		← みかん 一東	恵明病氣見舞ヲ貰
27	三平(内)	豆ふ 二挺	← 半紙 二帖・半紙 二帖	葬式謝世証二成礼
	久三郎	納豆 一袋	← 半紙 五帖	
	平吉	豆ふ 二丁	← 米 一升	(旧)12月 除夜せ
	七蔵	こんにやく 十	← 半紙 二帖・半紙 二帖	恵明見舞、葬儀取持礼
	小庄	畑米		
	本家	大牛房 三本		
28		→		(旧)1・1
30	重作	手製/納豆 一袋		(旧)1・3 年玉
	柳蔵	串柿 十本		茶・餅 出ス
2・3	権右衛門	← みかん 一東・半紙 口東	歳暮	
	庄三郎	← みかん 一東(五十)		
	猪作	← みかん 一東(五十)		
	彦十	← みかん (六十七)		こま供物配 折々歳挨拶
5	中根	← みかん 一東		(恵明)善資入ル挨拶
	龍運寺	← みかん 一東		
	綱又	← みかん 一東		(恵明)見舞受ル挨拶
	惣太郎	← みかん 一東		
	惣左衛門	← みかん 一東		
	久左衛門	← みかん 一東		
8	利右左衛門(内)	納豆 一重		
14	源右衛門	← 半紙 三帖・半紙 三帖		(旧)1・18 歳暮
	庄吉	祝儀		年頭
	林作	串柿 廿本		年頭
	中根正甫	祝儀 蒸羊かん (二本入)一本		年頭
15	喜三郎	← 半紙 一東		歳暮失念二付
	平六	← 半紙 二帖・半紙 二帖		歳暮、葬式取持・見舞受ル
1885・1・21	瑞林	串柿 廿本・十鉢		(旧)12・6 歳暮・年賀
2・13	本家(以)	串柿 廿本		(旧)12・29 歳暮
	三平	豆ふ 二丁	← 半紙 二帖	
14	久三郎	納豆 一袋		(旧)12・30
	三九郎	串柿 廿本		
	伝次郎	豆ふ 三丁		
	雪平	四鉢		歳暮
	田中太郎七	晒米糖 六尺	← 半紙 二帖・菓子	
	権四郎	豆ふ 三丁	← みかん	
	勝次郎	常焼 一足		歳暮 貫通へ

註)矢印は、先に贈ったことを表す。

## 2) 盆礼・中元の挨拶

盆には、表 6 に示すように、素麺の贈答が最も多くみられ、その量は 100～200 匁程度である。観世麩や地紙麩、扇麩など麩も多く、そのほか南瓜や瓜類、牛蒡などの野菜類や蒟蒻もみられる。蒟蒻は、新城のものであると産地も記している。また、「あげ酢シ」もみられる。

年 月 日	名 前	内 容	浄 慈 院	備 考
1878-8-27	久左衛門	← 半紙 五五枚・奈良橋(渡) 三舟		
	徳左衛門	← 奈良橋 三舟・唐扇 一本		
	三平	← 奈良橋 三舟		
	俊次	← 奈良橋 三舟		
	三平	← 奈良橋 三舟		
	利右衛門	← 奈良橋 三舟		
28	新田	← 素麺 甘わ・瓜 三舟		
	御吉	← 唐扇 一本		
	徳右衛門	西瓜 一ツ ← 素麺 甘把		
29	(新田)口太郎	カホチャ 一ツ・唐瓜 一ツ → 菓子		
	小豆 一升			
30	徳右衛門	米 一升・白瓜 三本 → 細筆 三本		
	孫太郎	菓子 五足 → 半紙 三帖・瓜 三舟		
		← 細筆 三本		
		← 素麺 甘把		
	五郎兵衛	素麺二 兩 → 唐扇 一本		
	久左衛門	素麺二 兩 → 唐扇 一本		
	三平	素麺 一 匁 → 細 二		
	平三郎	牛蒡 一 匁 → 米 四升・瓜 一本・花巻・素麺		
31	与平	(十銭) → 米 四升・瓜 一本・花巻・素麺		
	七蔵	ふ 四十五 → 素麺 一 匁・細筆 二		
	平吉	← 米 一升・瓜 一五		
	三九郎	(十銭) →		
	平六(内)	ふ 五十二 → 瓜 二舟		
9-1	平吉	(一銭) →		
2	秀	素麺 →		
	彦太郎	柿 →		
	勘十郎	半紙 五帖 →		
3	つね	祝儀 一包 →		
4	徳真寺	← 三銭 配書		
	竹意軒	← 二銭 配書		
5	梅	蒟蒻子 一箱(二銭) →		

註) 1) (旧)は旧暦を表す。

2) 矢印は、先に贈ったことを表す。

年 月 日	名 前	内 容	浄 慈 院	備 考
1879-8-29	源三郎	← 菓子 一包		
	三平	← 菓子 一包		
	徳左衛門	← 菓子 一包		
	三吉	カホチャ 一ツ・唐瓜 一ツ →		
	久三郎	素麺 一 匁 → 俵月 一本		
	弥一郎	← 半紙 五帖		
	三九郎	← 半紙 三帖		
	徳次郎	← 風、米 一升		
	いせ	牛蒡 五本・さつま芋 →		
30	徳左衛門	素麺 一 匁 → 不換金・細筆 二本		
	俊次	素麺 一包 → 菓子		
	三平	ふ 五十 → 扇 二本・道中記 一画		
	房吉	素麺 十五 匁 → 道中記 扇 二本		
	平吉	素麺 一 匁 → 米 一升		
	七蔵	ふ 四十 → 素麺 十一 匁		
	平六(内)	観世 五 匁 → 扇 一本		
	政平	地紙/ふ 五十三 → 半紙 二帖		
	源右衛門	← 半紙 二帖・菓子 一包		
	平四郎	← 菓子 一包		
	清七・平右衛門	← 菓子 一包		
	徳作	→ 小豆 一升・唐瓜 一ツ・茄子		
	彦太郎	← 半紙 四帖・扇 一本		
	徳作	← 菓子 一袋		
31	新家	餅 一重 沢山 →		
	ちか	飯団餅 →		
9-1	源右衛門	→		
	本家	→		
	幸作	白砂糖 半斤 → 扇 一本		
	新家	素麺 一 匁・温純 一重 →		
	栄助	← 素麺 十一 匁・手拭 巻物・菓子 一包		
	平左衛門	素麺 一 匁 →		

註) 1) (旧)は旧暦を表す。

2) 矢印は、先に贈ったことを表す。

年 月 日	名 前	内 容	浄 慈 院	備 考
1881-8-2	善与	温純 一重 沢山二入 → 筆		
	彦太郎	白瓜 三本・真桑 四本 → 菓子 一包		
3	妻吉	菊/露茶 一袋 →		
	直次	茶 一袋・あげ酢シ七 →		
4	三平	真桑 五本 → 細筆 三本		
5	久三郎	← 半紙 三伏		
	三九郎	← 半紙 三伏		
	俊次	← 半紙 五伏・重香		
	三平	← 半紙 五伏・重香		
	源右衛門	← 半紙 五伏		
	新家	← 半紙 五伏		
	三平	鞋 五十 → 唐扇 一本		
6	俊次	鞋 五十二 → 俵月 一本		
	平十	そうめん(百廿三匁) → 唐扇 一本		
	本家	そうめん・餅(百五匁) → 重香		
	彦太郎	← 半紙 三伏		
	実作	カホチャ 一ツ・真桑 五本 →		
7	政平	そうめん(百三十三匁) → 唐扇 一本・俵月 一本		
	七蔵	鞋 三十七 → そうめん 十 匁		
	平六(内)	こんにゃく五ツ → 唐扇 一本		
	惣太郎(使)	蕎麦 一升・瓜 十七本 →		
	久三郎	そうめん(二百廿匁) → 唐扇 一本		
	三吉	瓜 六本 → 重香		
	平吉	焼豆ふ 九ツ → 菓 一五		
8	佐次郎	鯛 巻袋(百四十六匁)・そうめん(百八十匁) → 筆 一本		
	平吉	団扇餅 七ツ → 真桑 二本		
	徳次郎	そうめん(百五匁) → 唐扇 一		
	源右衛門	そうめん(百三十三匁) →		
	栄助	← 二銭・菓子 一包		
9	新家	そうめん(百五匁) →		
	三九郎	そうめん(百五匁) →		
	庄三郎(内)	真桑 十本・白瓜 一本・黒瓜 三本 → 菓子 一包		
	彦太郎	← 菓子 一包		
	徳右衛門	← 菓子 一包		
10	秀	金米糖 一箱 → 唐扇 一本・菓子 一箱		
	孫次郎	菓子 四足 → 扇 一本		
	龍運寺(使)	扇鞋 五十 → 菓子		
	松助(内)	あげ 七ツ → 茄子・沢山二瓜 一本		
	瑞林	(十銭) 二包 → 米 三升・茄子 沢山・白瓜 一本		
18	彦太郎(母)	祝儀 一包 →		
	米作	菓子 一箱 →		
	辰蔵(母)	温純 一重 沢山 → 菓子		

註) 1) (旧)は旧暦を表す。

2) 矢印は、先に贈ったことを表す。

年 月 日	名 前	内 容	浄 慈 院	備 考
1882-8-21	瑞林	(十銭)・豆腐 二挺 → 米 五升・味増 一重・瓜 五本		
23	俊次、三平	← 菓子 一包		
25	久三郎	そうめん(百八十匁) → 上扇 一本		
	久三郎	← 半紙 三伏		
	松助	大あげ 七ツ → 半紙 二伏		
	三九郎	← 半紙 三伏		
	弥一郎	← 半紙 三伏		
	三平	← 半紙 二伏		
	平十	そうめん(百十匁) → 菓子		
	三吉	唐瓜 一ツ・カホチャ 一ツ →		
26	本家	素麺(百四十匁) → 半紙 三		
	善太郎	素麺(百三十匁) → 唐扇 一本・俵月 一本		
	徳四郎	そうめん・温純粉 一袋 → 半紙 二 匁 一本		
	徳左衛門	そうめん(百三十匁) →		
	龍運寺	そうめん(百六十匁) →		
	辰四郎	蕎麦 一升・素麺(百八十匁) → 菓子 一包		
	三平	鞋 五十 → 唐扇 一本		
	賢次郎	素麺(百五匁) → 半紙 一		
	三平	素麺(百匁) →		
8-27	新家	飯団餅 一重 →		
	平吉	素麺 九 匁・飯団餅 一重 → 菓 一五・菓子		
	徳右衛門	素麺(百廿五匁) → 菓子 一包		
	実作	← 三銭・菓子 一包		
28	徳次郎	素麺・細筆 一箱 → 半紙 五伏 扇 一本		
	勘十(内)	← 素麺・祝儀・半紙 二伏		
	辻平	蕎麦子 一箱 →		
9-3	久三郎	祝儀・菓子 一箱 →		

註) 1) (旧)は旧暦を表す。

2) 矢印は、先に贈ったことを表す。



素麺を買い求めた記録もみられ、素麺1箱が72銭、箱代が3銭であった。<sup>41)</sup> また、饅頭も多く用いられているが、浄慈院でも盆札や中元には、饅頭を打ち、斎には来客にも振舞っている。収穫した小麦を粉に挽いてもらった記録もみられるが、小麦3升を粉にするのに、挽賃は1銭8厘であった。<sup>42)</sup>

#### 4. おわりに

「山澄日別雑記」より、1875年～1886年にかけての地域の食文化について、検討した。明治初期から中期の社会的にも大きな変動期にあり、中央の事件なども度々記されている。贈答品の中にもその様子がみられる。

この時期で特筆すべきことは、愛弟子、恵明の病死であろう。病に臥してから、日々の病状を克明に記し、最善の手当てを施している様子が読みとれる。そして、多くの見舞いの品々、主に食品類が届けられている。また、東三河地方としては早い時期に、一部の人々ではあるが、養生のため牛乳を飲用していたことに、注目したい。

#### 引用文献

- 1) 杉浦博子、仲村香織：『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食（その1）、愛知学泉大学・短期大学紀要、44、33-40（2009）
- 2) 杉浦博子、稲吉真子：『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食（その2）、愛知学泉大学・短期大学紀要、45、25-32（2010）
- 3) 杉浦博子、稲吉真子：『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食（その3）、愛知学泉大学・短期大学紀要、46、77-85（2011）
- 4) 杉浦博子、稲吉真子：『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食（その4）、愛知学泉大学・短期大学紀要、47、27-35（2012）
- 5) 愛知大学総合郷土研究所：愛知大学総合郷土研究所資料叢書12集『豊橋市浄慈院日別雑記Ⅳ』あるむ、（2010）
- 6) 愛知大学総合郷土研究所：愛知大学総合郷土研料叢書13集『豊橋市浄慈院日別雑記Ⅴ』あるむ、（2011）
- 7) 5) に同じ 解題

- 8) 6) に同じ 解題
- 9) 豊橋市史編集委員会：『豊橋市史第三巻』、1113、（1983）
- 10) 5) に同じ 338
- 11) 5) に同じ 341
- 12) 6) に同じ 19
- 13) 「日本の食生活全集 愛知」編集委員会：『日本の食生活全集 23 聞き書 愛知の食事』農村漁村文化協会、256、（1989）
- 14) 5) に同じ 451、
- 15) 5) に同じ 467
- 16) 6) に同じ 284
- 17) 5) に同じ 270
- 18) 5) に同じ 347
- 19) 6) に同じ 172
- 20) 6) に同じ 228
- 21) 6) に同じ 198
- 22) 6) に同じ 168
- 23) 6) に同じ 169
- 24) 6) に同じ 173
- 25) 6) に同じ 222
- 26) 6) に同じ 224
- 27) 6) に同じ 225
- 28) 6) に同じ 228
- 29) 6) に同じ 184、185
- 30) 6) に同じ 199
- 31) 6) に同じ 203
- 32) 江原絢子、東四柳祥子編：『日本の食文化史年表』、吉川弘文館、142、（2011）
- 33) 32) に同じ 132
- 34) 32) に同じ 136
- 35) 6) に同じ 173
- 36) 愛知の酪農史編集委員会編：『愛知の酪農史』、愛知県酪農農業協同組合連合会、31、（1971）
- 37) 36) に同じ 33
- 38) 36) に同じ 73
- 39) 6) に同じ 18
- 40) 6) に同じ 247
- 41) 6) に同じ 270
- 42) 6) に同じ 347